毎日新聞

野良猫の殺処分ゼロ維持へ　105匹に不妊・去勢手術　三重

毎日新聞 | 2026/10/23 11:15（最終更新 10/23 11:15）　704文字



去勢手術の方法をどうぶつ基金の獣医師（左）から教わる三重県職員＝津市森町の県動物愛護推進センター「あすまいる」で2026年10月7日午後3時16分、長谷山寧音撮影

野良猫の殺処分ゼロを維持するため、津市森町の三重県動物愛護推進センター「あすまいる」では定期的な猫の不妊・去勢手術を実施している。7日には公益財団法人「どうぶつ基金」（兵庫県芦屋市）と共催での一斉手術があり、県内の各自治体で捕獲された生後4カ月～5歳ほどの105匹が処置を受けた。小さな命が失われることのないよう、地道な取り組みが続けられている。

あすまいるでは、地域の野良猫が増えすぎる問題に取り組む「どうぶつ基金」と協定を結び、2017年からほぼ毎年合同での一斉手術を続けている。近年はクラウドファンディングで資金を確保して独自の手術日をほぼ毎月設け、年間約1000匹に対応しているという。その成果もあり、県内では22年以降、犬や猫の「殺処分ゼロ」の状態が続いている。



どうぶつ基金の獣医師（手前左）から助言を受けながら猫の去勢手術に臨む三重県職員（右）＝津市森町の県動物愛護推進センター「あすまいる」で2026年10月7日午後3時16分、長谷山寧音撮影

手術費を抑えるため、あすまいるでは県内10カ所の保健所などから獣医師免許を持つ行政職員を募集。この日も、普段は別の業務に当たっている職員らが参加し、どうぶつ基金の獣医師らからアドバイスを受けながらメスを握った。

獣医師免許を持つが手術をしたのは初めてという県食品安全課の田中伸昌さん（44）は、「知識だけあっても実際にやってみると分からないことが多かった。普段の業務にも通じる部分があり、保護猫への理解も深まった」と語った。どうぶつ基金の佐上邦久理事長（66）は「生まれてすぐ殺される命があってはならない。我々と行政が協力することで救われる命がある」と話す。

あすまいるの南川喬子所長（56）は、「動物病院の獣医師さんだけでは手が足りていないのが現状。こうした取り組みで少しでも救える猫が増えたら」と期待している。【長谷山寧音】